新作玩具体験会３　―後編―　サンプル

「おはよう」

「ん……」

瞼は閉じたままなのに、強い日差しで室内が照らされていることがよく分かる。でもまだ眠くて、手探りで布団を探して中に潜る。

「こら。もう起きる時間だよ」

「や……もうちょっと……」

まだ眠い。なんだか全然寝た気がしない。

「全く……」

そう言う宗形は呆れたようだけれど、決して強引に起こそうとしないところが好きだ。いつでも甘やかしてくれて、優しい。

「なら私は朝食を作ってくるよ。いいこでお留守番できるかな」

「お留守……あ！」

そうだった。ここはテントで、宗形が調理中は大の字のまま一人で過ごすという話になったのだった。

急いで布団から出て周りを見る。やはりテントの中だった。

「おはよう」

「あ……」

まるで作戦にはまったような気分。それに寝起きのもさっとした顔を見られるのも恥ずかしくて俯いたまま頭を下げる。

「おはようございます……」

「昨夜の話は覚えているかな」

くすくすという笑い声。やはり宗形の手中にはまっていた。

「……はい」

言ってごらん、と言われるとまるで信用されていないような気になるけれど、きっと宗形にその腹はない。ただ自覚させようとしているのだ。

「総一郎さんが仕事のとき……貞操帯やお尻に玩具を入れてもらって……手足を拘束してもらって過ごします」

言葉にするだけで顔が赤くなる。だってこれは宗形が決めたことではない。自らが望んだこと。

「ここでは？」

「総一郎さんがご飯作ったりお風呂に入っている間、大の字で動かずに一人で待ちます……」
「ちゃんと覚えていたね。いいこだ」
「んっ」
すり、と頬を撫でられ、それから額にキスをもらう。
「今から朝食……ブランチだね。作ってくるけど、その前にトイレに行っておこうか」
「ん……おしっこ……」
裸で寝たせいだろうか。少し便意もあるような気がする。
「じゃあ行こうか」
指を絡めトイレに向かう。トイレと言っても地面に埋めた空き缶だけれど。
「……あの、」
「ん？」
とりあえず確実に出る尿を、と四つん這いになったものの、アナルに外気が触れたせいか便意が強くなってしまった。このまま排尿をしたらきっと一緒に出てしまう。でもそうすると、便は空き缶に入らない。
「うんちもしたい……」
「ああ、いいよ」
「おしっこしたらうんちも出ちゃう……」
普通のトイレだったらこんな宣言しなくて済んだのに。
「どちらから出したい？」
便意の方が今は強い。でも便を出せば尿も出てしまうし、それならさっさと終わる尿を先に出したかった。
「おしっこ」
「なら、栓をしておいてあげよう」
「え？　あっ」
くちゅ、という音が聞こえたと思った直後、硬いものがアナルに触れた。そしてずぷ、と中に入る。
「ほら、これでいい」
「ぁっ……」
栓というのは指だった。さっきの水音は指先を舐めて濡らした音だったのだろう。便意がある――便がすぐそこまで来ている状態なのに、指をそのまま入れるなんて。
「やぁ……」

「大丈夫、さあ、おしっこを出してごらん」
ただの栓としての役割だからか、指は全く動かなかった。それがなんだか焦らされているようでむず痒く、ついアナルを締め付けてしまう。
「ぁっ……ン……」
「今はオナニーの時間じゃないな」
またくすくすという笑い。この余裕の差が興奮を煽る。
「だって……」
きっと前までなら汚いから嫌だと単純にそう思うだけだっただろう。けれど今では「そんな汚いところにも触れてくれた」と思ってしまう。
「だって？」
「……栓、してもらえるの嬉しくて……」
「そうか」と宗形はまた笑った。大人の余裕。こっちは全く余裕がないというのに。
「うんちの我慢が気持ちいい？」
「あ、いえ、そうじゃなくて……うんちお漏らししないようにって指を入れてくれたのが嬉しくて」
きっとここにアナルプラグやディルドがあったらそれを入れていたことだろうと思う。でも緊急事態だからと指を使ってくれたことが嬉しかったのだ。
「舌でもかまわないよ」
「っ！　さすがにそれは無理……」
言いながら、尿がどんどん下りてくるのを感じていた。お腹に力を入れずに自然に出す――そのために身体から力を抜き、ペニスをそっと空き缶に入れる。
「ん……出る……」
「うん、たくさん出しなさい」
じょぼじょぼという、尿が缶を叩く音が響く。その音に、もうほとんど羞恥は感じなかった。あるのただ、快感。
「あぁ……たくさん出るぅ……」
寝起き特有の熱くて量の多い尿。外での四つん這い排尿というイレギュラーな環境が快感を高めていく。
「あぁ……んぅ……」
「慶人くんは本当に気持ち良さそうに排泄をするね」
「んっ……きもちいい……」

うっとりとしていると、尿の勢いが衰えてきた。寂しい。もう終わってしまう。
ぶるっと身体を震わせ排尿を終えると、お尻にキスが落とされた。
「とても可愛かったよ。排尿しているとアナルも緩むはずなのに、きゅうきゅうと指を締め付けていたよ」
「や……やだ……」
まるで好きもののように。でもきっとその通りだ。
「慶人くんにとって排尿はもう性感の一つなんだね。セックスをしているときのように締め付けるなんて」
「ぁ……やぁ……、ダメ……」
そんな風にしたのは宗形なのに、まるで最初から慶人がいやらしい身体だったかのようにのたまうなんて。
「起っちゃ……」
「うん、仕方ないね。今慶人くんはオナニーしていたようなものだからね」
「あ……オナニー？」
していない。ただ排尿していただけなのに。
「そうだよ。私は何も手を出していない。ただアナルに指を入れてうんちをせき止めていただけだ。なのにいやらしい声を出しながらアナルを締め付けていたんだから立派なオナニーだろう？」
「ぁぁ……やぁ……違っ……」
違う、と言いながらも心の中ではその通りだな、と思っていた。だってすごく気持ち良かったから。
「次はうんちでオナニーしてみようね」
「あっ！」
ずるっと指が抜かれた。指を咥えていたアナルは緩いままで、簡単に排便を許してしまう。
「ああっ、だめっ」
まだ缶の位置を確認してもらっていない。このまま出せば確実に漏らしてしまうだろう。
「どこっ、缶っ、缶どこっ」
必死にアナルに力を入れて便意に耐える。ずっと恥ずかしかった缶の位置調節も今なら早くしてほしい。
「もう少し前だよ」
「んっ」
膝を引きずるようにして少しだけ身体を前に動かす。しかしその後で四つん這いのままではいけない

ことを思い出した。我慢のしすぎで痛み始めたお腹に気を向けながらも必死に身体を起こして足裏を地面につける。腰を下ろし、和式トイレの姿勢になって、もう一度確認をねだる。

「うんちっ、お尻の穴、ここでいいっ？」

必死過ぎてもはや自分がどんな言葉を使っているかなんて考えていなかった。でもなんとなくいやらしい言葉を使ってしまったことは耳に残る。

「もう少し前だよ」

「んっ」

じり、と今度は踵を引きずるようにして前に出る。

「どうっ？　うんち出るっ」

「うん、そこでいいかな……ゆっくり出してごらん」

「ああ……ああっ」

ゆっくり出すなんてできるだろうか。下痢ではないようだけれど、勢いよく出てしまうかもしれない。

「んっもう出るっ」

「ダメだよ、ゆっくり出しなさい」

「ああっ！」

まるで塞ぐかのようにアナルに手が添えられた。せき止めるという意思はなく、ただ諭すように添えられるだけ。だからこそ、余計にアナルに力が入った。漏らすわけにはいかない。便を止めてはくれないから、今出したら手の上に排便することになってしまう。

「んんぅっ……」

苦しい。でも気持ちいい。我慢が気持ちいいなんて。痛いのに、苦しいのに、宗形に射精や絶頂だけでなく排泄までコントロールされているのだという快感。

「あ、あっ……ん、ふぅー……ふー……」

「そう、いいこ……」

アナルから手の感触が消えた。ゆっくり便を下ろすことを意識して少しずつアナルを緩めていく。

「んぅ……んー……はぁ……ン……ふぅー……」

ミチ、という音が聞こえた。恥ずかしい。でもやっと出せて嬉しい。

「ああ……ン……ふぅぅー……」

「上手……うん、大丈夫、そこでいいよ。ちゃんと缶に入ってる」

「んっ……」

便の位置を確認してもらうなんて、本当に甘えただ。でもその甘やかしが嬉しい。

「んぅ……きもちぃ……出るぅ……」
うっとりと、見守られながらの快感に酔いしれる。
「気持ち良さそうだ」
「うん……すごい……うんち気持ちいいよお……」
それにこのあと、お尻を拭いてもらえるというのも嬉しい。小川で腰を振ってペニスを洗うのを見てもらうのも、全てが。
「んっ……あ、切れちゃう……」
「うん、一度アナルを休ませてあげようか」
切れてもいいのだ、とそれで思えた。だからゆっくりとアナルを閉じて一度便を切り離す。
「ンッ……」
「可愛いよ。とても可愛い。慶人くんはうんちの仕方も全て可愛い」
「ん……総一郎さん……」
前に来て、というと宗形は面倒臭がることなく来てくれた。正面にある胸に顔を寄せる。もちろん腰の位置は変えないようにして。
「このままうんちしたい……」
「見ていなくて平気？」
「ん……多分……」
もし缶の外に排便してしまったら、掃除は誰がするのだろう。自分ではしたくないけれど、宗形にさせたいとも思えない。
「……やっぱりうんち見て……」
「怖い？」
「汚しちゃうかも……」
「そうだね、じゃあもう一度お尻の穴を確認しよう」
移動したばかりだというのに、宗形はまたすぐに背後に回ってアナルの位置を確認してくれた。
「ああ、そこでいい。大丈夫だよ」
「んっ……うんち……」
またゆっくりとアナルが開き便が下りた。もう場所に不安はないなと思った瞬間、次の恐怖が身を襲った。
「あっ」
「ん？」

「うんち……漏れない？」
「ん？」
たくさんの排尿の後に二度目の排便。もしかしたらもう缶はいっぱいになってしまっているかもしれない。
「うんち、まだ缶に入る……？」
「ああ、そうだったね。……ギリギリかな。でも私が袋を持っておくから大丈夫だよ」
「ぁ……やだぁ……」
こんな明るい中、排泄物の入った透明の袋を持たれてしまう。それだけでなく、そこにさらに便を足すのだ。
「恥ずかしくないよ。さあ、うんちでオナニーしてごらん」
「んっ……」
嫌なのに、オナニーと言われるとしたくなる。だって毎日のようにしていたオナニーを昨日も今日も一度もできていないのだ。
この数か月、ゆったりイけるようになったことでオナニーの頻度は以前ほど多くはなくなっていたけれど、夏休みに入ってまたたくさんするようになってしまっていた。だって、退屈で。オナニーをしたら宗形がこちらに意識を向けてくれるかもしれない、なんて、仕事の邪魔だと思いながら。
結局そのせいで毎日絶頂する、というパターンを身体が覚えてしまっていたらしい。オナニーがしたくて、苦しい。
「ん……んぅ……ぁ……」
ゆっくりと便が出る。それが今、宗形の持つ袋の中に入っていくのかと思うとぞわぞわした。もうペニスは痛みを訴えているというのに萎える気配もない。
「あっ……」
ぽちゃ、という音がして便が落ちた。気持ち良かったのに、変なところで切れたせいか残便感は残るが次が出そうにない。
「やぁ……やだ……」
「慶人くん？」
「うんち切れちゃったっ！　もっと出したい……」
「ああ、でもまた後で出せばいいよ。気持ち良かったね」
「や、オナニーしたいっ」
もっと気持ち良くなりたい。どうして玩具がここにないのだろう。オナニーがしたい。自然の中でオ

ナニーなんてなかなかできることではないし、それを宗形に見ていてほしいのに。
「もう気持ち良くなっただろう？」
「やっ！　もっとっ！」
さすがに排泄だけでイけるとは思っていない。でももっと気持ち良くなりたい。もし排泄で絶頂できるのなら、そうなるまで排泄し続けたいと思うくらい。
「慶人くん、うんちもおしっこも無理に出そうと思って出せるものではないよ」

〜〜〜〜
「とろんとしてる。可愛いね」
宗形の顔が近付いてきた。反射的に目を閉じると、唇にキス。舌が唇を撫で、中に入ってくる。
「ん……」
気持ちいい。宗形はいつも所作が優しい。話し方も、視線も、指も、舌も。
付き合い始めたばかりのころ、突然のディープキスに緊張して唇を噛んでしまったことがあった。傷付けたのは自分の唇であって宗形に怪我はなかった。でもそれが逆によくなかったようで、舌を使うキスをするときは何度も唇を啄んで濡らし、慣れさせてくれる。
「ん……ぅ……」
今ではそれが合図だと認識できるようになったけれど最初はそれすら分からず、一度キスを止めて「舌を入れるよ」と言わせてしまっていた頃もあった――それはそれで羞恥プレイのようで嫌ではなかったのだけれど。
宗形の舌が前歯を撫でた。唇を舐めるところから始め、上の歯、下の歯と段階を踏んでくれる優しさ。舌が絡み合うころにはもう、とろとろだ。
「んぅ……ン……」
唾液を混ぜるようなキスに酔いしれ、呼吸さえも忘れていた。でも忘れてもいい。そのときは多幸感と快感で息苦しさも感じないし、酸素が必要なタイミングになれば宗形が教えてくれるから。
「ぁ……」
唇が離れ、物足りなさから勝手に唇が開く。早く塞いで舌を中に戻して――そこまでは叶えてくれないけれど、一度唇を擦りつけるように食み、少しだけ空気を入れてくれる。
「ンッ……」
そこでようやく呼吸の方法を思い出すのだ。それと同時に息苦しさも感じるようになり、あとは落ち着くまで腕の中で背中を撫でてもらう。

「上手になったね」
「んぅ？」
「キス。ちゃんと感じられるようになった」
「ぁ……」
宗形がくすりと笑った。それ以上何も言わなくていいのだと分かり、答える代わりに額を胸に擦りつける。
「そろそろ鼻で息をしてみよう」
「や……」
今のままでいい。上手くなれば宗形を気持ち良くさせることができるのかもしれないけれど、甘やかされるキスが好き。
「このままがいい」
「そうか」
身体が揺れている。でも笑われたって悔しくなんかない。
「もっと」
「キス？」
「うん……ン……」
それからたくさんキスをもらった。間には休憩も挟んでいるのにどんどんどんどん頭がぼうっとして、何も考えられなくなって。気付いたら敷きっぱなしの布団の上に仰向けに寝かされていた。
「慶人くん」
「ん……」
ぼうっとする。まるでイった後のよう。
「慶人くん、おっぱいとおちんちんに甘いの塗ってみようか」
「ん……甘いの……？」
何だろうか。はちみつとかシロップだろうか。
（あ、もしかして舐めてくれる……？）
さっき思い出していた女体盛り。男だから男体盛りと言うのだろうか、その辺のことは分からないけれど、それを宗形はしようとしてくれているのかもしれない。ご飯だと溢してしまうから、塗って舐める、みたいにして。
「そうだよ。甘いの塗ってもっと可愛くなってみようか」
「ん……なる……総一郎さんの好みになりたい……」

宗形はよく可愛いと褒めてくれるから。頑張っているだけ、笑っているだけ、遊んでいるだけ、全て何をしても「可愛い」と言ってくれる。

「いいこだね。じゃあもっと私の好みになってくれ」

眠ってしまってもかまわないよ、と瞼にキスが落とされた。とろんとする。セックスの後のお疲れ様のキスみたい。

「ん……」

大人しく目を閉じていると、乳首に濡れた感触があった。乳頭に何かを塗り込められている。薄く目を開けて覗いてみると、さきほど見た小さな刷毛だった。

「あ……」

「ん？」

「蚊……」

「そうだよ。蚊に乳首をたくさん吸ってもらって、大きくて真っ赤な乳首にしてみよう」

頭が回っていないからか、嫌だと思えなかった。むしろこれで宗形の好みに近付ける。

「ん……乳首……」

「慶人くんは乳首も敏感だからね。蚊に刺されたらもっと敏感になって可愛くなれるよ」

「可愛く……？」

「そう。乳首はシールが貼れないから、指先でたくさんすりすりしてあげる」

「あ……」

膨らんだ乳頭を抓まれ、擦られることを想像した。じわ、と乳首が痒くなる。

「乳首痒い……」

「まだ刺されてないよ。ああ、刷毛がくすぐったいのかな」

ちろちろと刷毛が乳頭の先端を擦った。少しだけちくちくしてむず痒く、でも気持ちがいい。

「んぅ……やだぁ……」

もっとごりごりしてほしい。痛いくらいに乳首をつねり、爪痕を残すくらいきつく痛めつけてほしい。

「すぐ終わるよ」

右が終わると今度は左。何度もボトルに刷毛を戻し、液体を掬うようにして塗り込められた。

「ああ……」

そんなに塗られてしまって、外に出たら一体どうなってしまうのだろう。

「さあ、乳首はこれでいい。次はおちんちんだよ」

「ひっ！　や、やだ、それは……」

「さっき乳首とおちんちんに甘いのを塗って可愛くする、と言っただろう？」
「ぁ……」
そうだ、言ってしまった。宗形にもっと可愛いと言ってほしくて。
「どうしようか。やっぱりやめる？」
即答することはできなかった。だって、やはり掻くことも痒み止めシールを貼ってもらうこともできないペニスを刺されるというのは怖い。
「嫌ならしないよ」
「総一郎さん……」
やめたい。せめてペニスではなくて他の場所なら――でも、宗形はペニスがいいからそこを選んだのだと思うと……。
「……してください……」
「慶人くん、」
「して……おちんちん……その甘いの、塗って、おちんちんいっぱい刺されるように……」
本当は嫌だ。怖い。だって痒みなんて我慢できない。でも宗形が――大好きな宗形が、そこを刺されることを望んでいるのだ。
「本当にいい？」
「はい……でも暴れるかも」
「かまわないよ。たくさん抱きしめて慰めよう」
「ん……」
それならいい。宗形が抱きしめていてくれるのなら。
目を閉じてシーツを握る。ちく、という感触はすぐに与えられた。
「ああ……」
本当に塗られてしまった。これでもう、あの拷問のような時間が確定してしまった。
「痒くなったら……ここを蚊に刺されて痒くなったら串で刺してあげるよ」
「え……？」
すでに痒い。小さな刷毛の先端がペニスをちくちくと虐めている。
「爪楊枝や竹串がある。それにフォークも。でもそんなものでツンツンしたら痛いかな？」
「痛くないっ！　してっ！　してほしいっ！」
想像するだけでペニスが疼く。今、すでにもうしてほしくなっている。だって痒い。刷毛と液体のとろみが痒みをもたらしている。

「ツンツンしてっ！」
「今？」
「今っ！　痒いっ！」
「ダメだよ。まだ刺されていないからね」
宗形は乳首に塗った量の何倍もペニスに塗り込めた。根元から先端、そして皮の窄まりをほじくるようにしてまで塗った。もし蚊がそんなところに入り込んで刺したらきっともう壊れてしまう。あまりの痒みで発狂してしまう。
「……よし、これでいい。そろそろ外は暗くなってきたかな」
外に出ると、そこはうっすらと暗くなり始めていた。
「……ああ、塗る前におしっこをしておいた方がよかったかな」
「大丈夫です……今はおしっこ出ないから……」
手を繋ぎ、ゆったりと小川沿いを歩く。さらさらとした水音が心地よい。でも、いつ蚊が身体にとまるかと思うと気が気ではない。
「……慶人くん」
「あ……はい」
「可愛い。乳首とおちんちんがそんなに気になる？」
心ここに非ず――それがバレていたらしい。せっかく散歩に連れ出してもらったのに申し訳ない。
「ごめんなさい」
「謝ることはないよ。むしろびくびくしながら歩いているのが可愛い」
突然、するっと自然な動作で陰嚢を撫で上げられた。
「ひゃあぁっ！」
「とても敏感だね。今シールを剥がしたら痛いかな？　気持ちいい？」
「……ぁ……痛い……痛くて気持ちいい……」
陰嚢にシールを貼る、という経験は今回が初めてだった。手足に貼った防水仕様の絆創膏でも剥がすときは痛いのに、陰嚢に貼られたシールを剥がすときは一体どれほどの刺激になるのだろうか。それを考えなかったわけではない。ただ、それすらも楽しみだったので何も言わなかっただけだ。
「剥がしてみる？」
「……でも……」
剥がしてほしい。でも剥がされたらまた刺されてしまうし、シールの下にある噛み痕が治ったという保証はない――と思うと、剥がしてほしいとは言えなかった。それに、本当はまた刺されていいとも思

っていることがバレてしまうから。
「やはりシールがあると触り心地が違うな」
足を止めた宗形が目の前に膝をついた。そして腰に腕を回され、引き寄せるようにして陰部に顔を埋められる。
「あっ……や、総一郎さん……」
フェラチオとも違う行為。ただそこに顔を埋められるだけ、というのが逆にいやらしい。
「いい匂いだ。甘いね。シールで慶人くん本来の匂いが薄まってしまうのは悲しいけど、とてもいい匂いだよ」
「やだぁ……」
「ちゃんと慶人くんのえっちな匂いもするよ」
「んっ……」
陰部の匂いチェックはいつされたっていやらしくて、恥ずかしくて、興奮する。でも外でこんな急に、しかも宗形が膝をついてするなんて。
「やだ……」
しかし腰を引こうにもがしりと腕を回されてしまっていて身動き一つ取れない。無理に足を引けば転んでしまうだろう。
「ああ、慶人くんの匂いが強くなってきたよ」
それは単に勃起し始めたからというだけの話だ。勃起を臭いで表現される羞恥。スン、と強く鼻から息を吸い込む音が聞こえてくる。
「……これでいい。きっと蚊もすぐに慶人くんの匂いに気付く」

〜〜〜〜

痒みが現れたのは食事を始めてすぐのことだった。今日の夕食はカレーライス。温度とスパイスで体温が上がったことによる痒みだった。きっと宗形は全て計画の上だったのだろう。
「痒いっ」
「掻いていいよ」
スプーンを皿に置いて両方の乳首を人差し指の爪で掻く。気持ちいい。痒いところを掻く快感がこんなにも強いなんて。
「ああっ、きもちぃ……」

カリカリカリカリ。
でも掻くだけでは足りず、搾るようにして乳輪ごと潰して乳頭を扱く。
「ああ……あああ……」
性感とはまた違った快感。でも求めているものがすぐに与えられるというのは嬉しかった。
「乳首が赤くなっているよ」
宗形は正面に座り、スプーンを何度も口に運んでいた。まるでテレビを観ながらの食事みたい。
「気持ちいい……気持ちいいからぁ……」
掻き過ぎたら血も出るし、痛みを伴うようになる。分かってはいるけれど止められなかった。
「アアッ、きもちっ、あんっ」
大好きな乳頭を捏ねても今は性的な興奮は催さなかった。ただとにかく痒いところを虐めることができて嬉しいだけ。
「痒いのは乳首だけ？」
福神漬を取り分けながら宗形が言った。
「おちんちんやタマは痒くない？」
「あ……」
痒みは感じていなかったのに、思い出させられたことで痒みを覚えた。頭の中で、ペニスにとまった蚊の映像が思い出される。
「ああ！　痒い！」
ペニスも陰嚢も会陰もアナルも痒かった。全てが痒い。普段ならたくさん気持ち良くなれるはずの場所が全て痒くてたまらない。
両手で乳首を捏ね回しながら腰を振り、椅子に陰嚢を押し付け擦る。ゴリゴリ、中身が潰れそうだ。それでも表面の痒みは治まらない。
「がゆいいいいい！」
「可愛い。食事中なのにおちんちん掻こうとしてるの？　それともおちんちんが掻けないからタマを掻いているのかな」
テーブルが邪魔で見えない、それは分かる。でもそんないやらしいことは訊かずに覗き込んでほしい。でないともっといやらしい気持ちになって体温が上がり、更に陰部が痒くなってしまうから。
「掻いてるっ！」
「うん、掻いてるね。でもどこを掻いてるのかな」
「タマタマっ！」

表面積の広いそこはどうやら一面刺されてしまったようだ。痒い範囲が広すぎて、ごりごりと睾丸を潰すように揉むしかない。
「ああ、そんな風にしたら潰れてしまうよ」
「でも痒いっ！」
中にある睾丸は痛いが表面の皮は気持ちいい。どちらを取るかと言われれば、やはり痒みの方だった。
「あああああ」
ゴリゴリゴリゴリ。押し潰すと快感と痛みがせめぎ合う。
「ああああああぁぁぁ……」
痛みが増し過ぎたので、今度は皮をつねってみた。これが驚くほど気持ち良くて、夢中になって場所を変えながらつねっていく。
「……痛そうだ」
「きもちっ、きもちいいっ！」
顎が痒い。涎が垂れている。それに気付いた宗形が苦笑しながら拭いてくれる。
「可愛い赤ん坊なのにな」
宗形が慶人の食器を片付けた。まだ食事は途中だけれど、もう食欲はないのでかまわなかった。
「上がりなさい。大きく足を開いて」
「はいぃっ」
テーブルの上に乗り、まだ食事を続ける宗形に向かって大きく足を広げた。でも陰嚢を弄る手は止められない。
「ああ……きもちい……タマタマ潰れる……」
皮をつねり、たまに押し潰す。でも今度はまた乳首が痒くなってしまった。
「ああっ、総一郎さんっ」
「ん？」
「乳首噛んでぇ……」
乳頭が取れるくらい噛んでほしい。そして噛んだまま引っ張ってほしい。それくらい痒い。
「私はまだ食事中だよ」
「や、お願い！」
もう我慢ができない。ペニスだって会陰だってアナルだって痒いのを我慢しているのに。
「総一郎さんっ！」
助けてほしい。今助けてくれるのは宗形しかいないのに。

「お願いっ」

「……分かった。これで刺してあげよう」

宗形が手に取ったのはサラダ用に用意されていたフォークだった。

約４万７千文字です。

宜しくお願い致します。